歴史を歩く⑮

町文化財紹介コーナー

『都萬神社』

国道２２０号線沿い、大崎交番所近くに都萬神社は所在する。シラス台地の縁辺部の小高い丘の上にあって、敷地の西側から三文字の町が一望できるし、上町の町からも神社境内の山林が見える。まさにシンボル的な存在だ。国道に断ち切られてしまっているが、鳥居から国道をはさんで南側に直線的な宮之馬場集落の通りが見える。かつてこの通りは境内に続く参道であった。最近この通りから見る都萬神社の風景が好きになった。

都萬神社は日向国の５つの郡（臼杵郡、児湯郡、那珂郡、宮崎郡、諸県郡）ごとに一社ずつ建立された。諸県郡に置かれた『妻萬神社』が本町の都萬神社に由来するものである。ただし創建の時期は不明である。もともとは、志布志市有明町原田にあったが、天文９年（１５４０年）に焼失し、現在の場所に遷宮したものである。都萬神社は、ニニギノミコトの妻であるコノハナサクヤヒメノミコトを祭神とする。

コノハナサクヤヒメは天孫降臨で日向国に降臨したニニギと笠沙の岬で出会い、求婚される。父のオオヤマツミはそれを喜んで姉のイワナガヒメとともに差し出すが、ニニギは美しかったコノハナサクヤヒメとだけ結婚し、イワナガヒメは郷里に帰してしまった。オオヤマツミは「イワナガヒメを妻にすれば御子の命は永遠のものとなり、コノハナサクヤヒメを妻にすれば木の花が咲くように繁栄するのに、コノハナサクヤヒメとだけ結婚したため、命は木の花のようにはかなくなるだろう」と嘆いた。そのとおり、それ以降の子孫の天皇の寿命は人間と同じ長さになってしまった。

コノハナサクヤヒメは一夜にして身ごもったため、ニニギは自分の子どもではないのではと疑った。その疑いをはらすため、「ニニギの本当の子どもなら、例え炎の中でも無事産めるはずだ」と産屋に火を放ち、その中でホデリ（海幸彦）、ホスセリ、ホオリ（山幸彦）の三柱の子を産んだ。ちなみに初代天皇である神武天皇はホオリの孫にあたる。

遷宮前の都萬神社についての記録は焼失してしまい、詳細については明らかにすることはできない。現在知られている日向国内の『妻萬神社』の記録について簡単に紹介すると、

・天安２年（８５８年）、『従五位上』から『従四位下』の位を授かる。（『日本三代実録』より）

・鎌倉時代初頭には、98丁もの領地を所有していた。（建久８年（１１９７年）『日向国図田帳』より）

このことから南九州でも実質的に最も有力な神社であったことが分かる。

遷宮後の社殿の建造・改築の記録については『大崎名勝誌』の中に記されている。

天文22年（１５５３年）に肝付本家16代目兼続らによって社殿の造立が行われ、天正16年（１５８８年）には島津本家16代当主義久と17代当主義弘らによって改築されている。さらに、寛文６年（１６６６年）には鹿児島から大工衆が来て、藩庁より銀１貫８５０匁が支給され、地元の寄付を受け、社殿と末社の修理を成就したとある。

中世から近世にかけては武家、領主より篤く崇敬された。国指定文化財である『籠菊双雀文様鏡』をはじめとする貴重な資料が現在も残っている。これらは、時代の有力者によって奉納されたものだ。

現在の社殿は大正５年（１９１６年）に再建されたものである。末社の１つである稲荷神社の前面には、当時の宮大工によって彫られた銘文がある。内容は次の通りである。

―　明治44年に大風によって境内の神社は全部倒壊し、大正２年に工事に着手し、５年に竣工するに至りました。この工事期間、爐を設け、朝夕沐浴をし、心を引き締め、工事に臨みました。この稲荷堂は、工事記念のために特別に奉寄進したものです。大崎村永吉２２７　大工　伊集院久長　52歳　―

特に本殿の造りは精巧で、上部に彫りこまれた十二支は見る人の心をひきつける。銘文にあるとおり、久長が精魂をかけて建築に取り組んでいる姿が目に浮かぶようだ。

94年経った今も、都萬神社の社殿は凛とした風格を残している。あたかも、永い歴史の重みを背負っているかのように。

【大崎町埋蔵文化財専門員　内村憲和】